各課一部ずつ配布していますので、回覧願います。

北 基本テーマ その自然と人

札幌市博物館計画 ミューズ・レター

Muse Letter

2001.10 No.9 発行●札幌市市民文化局 札幌市中央区北1条西2丁目

電話 011-211-3261 FAX 011-218-5157 http://www.city.sapporo.jp/museum

博物館活動の拠点施設

「札幌市博物館活動センター」11月22日オープン

今年6月から改修工事に着手していたリンケージプラザ（5・6階）の博物館仮収蔵庫は、11月22日、新しく「札幌市博物館活動センター」としてオープンします。ここでは一足先に収蔵展示室をご案内しましょう。

5階エレベータを降りると，そこは太古の海の中。正面には「厚田産ハクジラ化石」のシンボル展示が浮かび上がります❶。今から900万年前の札幌の海には，体長5mにもおよぶクジラが恐らく群れをなして泳いでいたことでしょう。

ゆるやかな曲線にそって収蔵展示室へ入ると，室内は大きく4つのゾーンに分かれています。

エントランス②

■ビジュアルメッセージ

この活動センターを舞台にしたこれからの活動内容を映像でご紹介するコーナーです。

北・その自然と人③

■札幌のおいたち

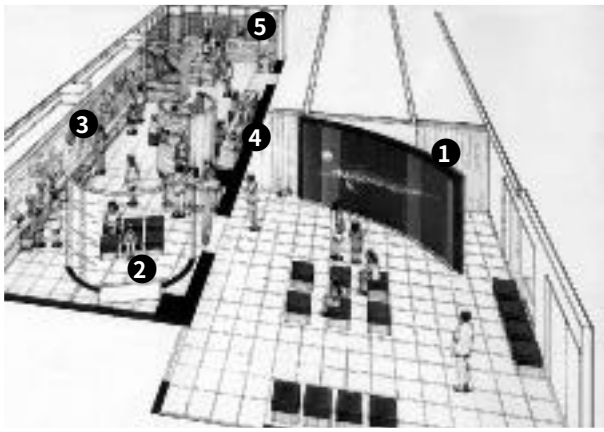
札幌の自然の基盤である「石狩低地帯」が形成されるまでの地球史をダイナミックに展示，紹介します。

■北からの訪問者、南からの来訪者

石狩低地帯は地球規模の気候変動に大きく影響を受け、暖かな時期には暖かな地域の生物が、寒い時期には北から寒さに適応した生き物たちがやってきました。ここでは、複雑で多様な石狩低地帯の生物相をご紹介します。

■豊平川が運んだ街・さっぽろ

札幌は豊平川が運んだ多くの土砂によって基盤が形成され、水はけのよい大地に人が集まり、街がつくられてきました。ここでは母なる川・豊平川と札幌の街について展示します。



札幌コレクション④

これまでに収集された札幌の昆虫や植物，菌類など、札幌が育んできた生物の多様性を展示します。

i ミュージアムギャラリー⑤

このゾーンは「i＝私＝市民」が主体の展示コーナーです。市民のコレクションを集めた企画展や発表の場として活用していきます。オープニングは，市民グループによるアンモナイト展が開催されます。

博物館活動センター
〒060-0001 中央区北1西9リンゲージプラザ内
TEL 011-200-5002　FAX 200-5003
【開館日】土曜日
※火～金曜日は、団体利用のみ（電話予約制）
【開館時間】10時～17時
【休館日】日・月曜日、祝日、年末年始

特別寄稿 博物館探訪・スミソニアン博物館③

10年間の大討論―スミソニアン協会の創立―

北川芳男（元北海道開拓記念館学芸部長・理学博士）

アメリカ議会は、1838年にスミソンの遺産の受け入れを承認したものの、協会設立の具体案については先送りの状態が続いていた。当初、政府が、スミソンの遺言にある「知識の増進と普及」に基づいてソニアン協会の基本計画は次のようなものであった。

■知識の増進

①新しい学問的な成果に賞金を出す。

②調査研究に研究費を提供する。

■知識の普及

①定期刊行物を出す。

②専門書を刊行する。

スミソニアン博物館群（正面奥は、米連邦議会）

この政府案に対して、議会ではスミソンの意志を忠実に反映した独自の提案を議論した。ある議員は、国立大学や農業研究所の設置をもくろんだ。また、国立図書館や天文台の建設を主張した者もあった。議論は百出したが、最終的に、議会としてまとまった計画案は「政府案に加えて、協会に図書館・博物館・ギャラリーを設置する」というものであった。こうして、1846年8月10日の第28回議会において、スミソニアン・インスティチューション設立の法案が可決されたのである。

スミソンの遺産譲渡の通告が、合衆国大統領に届いてから10年の歳月を経てスミソンの意志が花開くことになったのである。

議会はスミソニアン協会の発足に向けてすばやい対応を示した。まずは、協会を運営・管理する最高機関として、評議員会を設置した。その構成は、副大統領、最高裁判所判事、上院と下院からそれぞれ3名の議員、市民代表6名の計14名とし、新しい協会を強力に推進する最高責任者の長官を選出することが最初の議題となった。評議委員会は、スミソニアン協会の初代長官としてプリンストン大学の物理学者ジョセフ・ヘンリーを選出した。ヘンリーは創立時から32年間、長官としてスミソニアンを世界に誇れる協会にするために全精力を注いだ。

なお、スミソニアン協会の長官は、アメリカの行政機構の中で、各省庁長官と同格であることを付け加えておく。

写真1 クッチャロ湖にて調査中

ニューフェイス 登場

はじめまして、山崎真実と申します。この10月から植物担当の学芸員として、皆さんと一緒に活動していくことになりました。まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いします。

さて、私は一体何者か?!、ちょっとだけご説明いたしましょう。

胸まである長靴をはき、手にはなにやら長い棒をもち、遠目にはシジミ採りのように見えるかもしれませんが、普段はこんないでたちで(写真1)沼・川・湖・湿原から道路わきの側溝に至るまで、道内各地に出没して水生植物を採集しています。長い棒は、実は高枝切り剪定バサミで、これを如意棒のように伸ばして，岸辺から手が届かない水面や水中の植物を採ります。何のために採るか?…研究目的があってやっていることなので乱獲はしません。

私は大学で植物分類学を勉強していました。一言に植物といっても世界中に約26万5千種(コケ植物と維管束植物)…これは発見され名前が付けられているものの数で、特に熱帯地方にはまだ発見されていない植物がたくさんあると言われています…が生息するとされ、私たち人間が植物それぞれの特徴を調べて、“似たものどうし”ごとにグループ分けをしています。数ある植物の中で私が研究対象としているのはスイレン科 *Nymphaeaceae* コウホネ属 *Nuphar* (写真2)というグループです。皆さんが公園などで見かけるのはヒツジグサの園芸品種(スイレン属 *Nymphaea*)ですが、コウホネ属はスイレン属と同じような葉をつけ、花は黄色で水面から突き出て咲いています。湿原の風にゆらーりゆらーりと揺れて水面に波紋をつくる小さな黄色い花は、まさに水の上の妖精(*Nymph*)。しかし、コウホネ属植物は形・色・葉の生活形等を生育環境によって変化させ、図鑑の記述どおりの姿を見せない曲者(くせもの)なのです。北海道にはコウホネ、ネムロコウホネ、オゼコウホネの3種が知られていますが、それらの特徴にあてはまらないコウホネ属植物があり、私はその名無しの植物について、属の中での他の種との分類学的位置関係を、主に形の面から追求しています。

生き物だから、変わり者がいたり曖昧さがあるのは当然。ですが、科学的根拠を示して明らかにしていくことはそう簡単なことではありません。水草の中には、多くの植物分類学者を悩ま“問題児”が比較的多くいます。

水という環境にしたたかに適応して生きる彼らも、最近は絶滅の危機にさらされている種類が多くなってきました。現在、公園整備の進んでいるモエレ沼もかつては水生植物の宝庫であったといわれています。しかし、札幌市内の水辺の植物はまだ十分な調査がされているとはいえません。

普段は気にもかけない水の中、どんな生き物がいるのかのぞいて見てください。(水に落ちないように!!)私も博物館活動の一環として、徐々に調査していきたいと考えています。川で、沼で、道ばたで…奇妙な格好をしたお姉さんを見たら、それは私です。

博物館活動センターと水草と私をもっと知りたい方は、ぜひとも植物持参で博物館活動センターへおこしください。お待ちしております。

写真2　ネムロコウホネ

ミュージアムサロン始まる

開かれた博物館づくりのチャンネルの1つとして，ミュージアムサロンが活動を始めました。メンバーは，公募による市民のほか学識経験者や自然教育の専門家ら16名で構成されています。

初回の会合では，市の博物館計画について説明と質疑応答が行われたほか，現在整備中の博物館活動センターを見学しました。また2回目のサロンでは，各メンバーがお気に入りの博物館や好きな札幌の自然を書き出しながら，全体の傾向や特色を考えてみました。また，これから取り組んでいきたい活動として―資料のデータベースをつくりたい，自然体験活動を実施したい，ボランティアのあり方を考えたいなど―10項目以上にものぼるメニューが出揃いました。

今後も月1，2回のペースで会合を持ちながら，これらのメニューからいくつかのテーマを絞り込んで具体的な活動を進めていく予定です。

博物館活動センターのオープン記念事業

	講演会	博物館フォーラム	講演会	企画展
日時	11月23日（祝） 14:00～15:30	11月24日（土） 14:00～16:00	12月1日（土） 14:00～15:30	11月22日～1月12日
会場 定員	リンケージプラザ （中央区北1西9） 2階第1研修室　定員：100名	同左	リンケージプラザ5階 博物館活動センター講義室 定員：50名	リンケージプラザ5階 博物館活動センター収蔵展示室
テーマ	成長する博物館のひみつ	札幌創世記 ―自然と街のなりたち	アンモナイトから 見える世界	アンモナイトは“語る”
講　師 出演者	滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員 布谷知夫 氏	・札幌市文化資料室 新札幌市史編集員 榎本洋介 氏 ・札幌市市民文化課 古澤仁 氏	三笠市立博物館 主任研究員 早川浩司 氏	市民愛好者グループ

読んでねコーナー

『放課後博物館へようこそ』
浜口哲一著／地人書館

著者は，博物館を「放課後博物館」と「遠足博物館」の2つのタイプに分けています。ごくたまに訪れるような遠足博物館に対して，放課後博物館は，市民と博物館が日常的につながりを持っている館をいいます。著者が学芸員として勤める平塚市博物館は，地域に目を向けた放課後博物館のいいお手本です。多くの市民が館の活動に積極的に参加し有機的なつながりを持つことで，地域再発見の大きな成果を生み出していることがよく分かります。これからの札幌の博物館活動にも大きなヒントを与えてくれます。

さっぽろ市
03-P09-01-45
13-2-7